

—サムラングCO-OPは、黄信号?—

HANDSが平成10年4月から、他のコミュニティーに先駆けてサムラングで設立支援した多目的住民組合は、順調に見えた運営がここにきてつまずいています。すでに組合に3000万円の借金をしてしまったメンバーもいます。組合所有のカラバオ(水牛)を、ドリ(伝統的結納)に使ってしまった組合員がいたとも聞いています。経理担当のエルナ先生が、昨年3ヶ月ほど出産休暇で離れていたことも原因かも知れません。

CMBはすべての運営を組合に託すのは時機尚早と、組合経理を現在その管理下においています。肥料を買いたいが組合資金を出してくれないと、CMBディレクターFr. デオの集中管理に対する不満も聞こえますが、CMBは住民に組合運営の理念を周知させるのが先決と、専門家を招いて4月からセミナーを予定しています。タダウ・ミンダナオ(フィリピンの篤志家資金による干ばつ緊急支援から始まった山岳部住民支援プログラム)により近く実施予定の有機農法指導も、組合運営建て直しのために期待されています。

もう一つの心配は治安問題。反政府ゲリラではなくカラバオや馬目的の賊によるものです。あらゆる道がサムラングに続き、人々が会えるコミュニティー、と現組合長ラウロのいつかの手紙にありました。どこからでもアクセスできるのも山賊横行の理由でしょうか。CMBと結ぶ無線も壊れている現在、政府設置の見張り小屋が唯一頼りの住民達です。

—水道整備が進むモンゴカヨとトゥランボン—

モンゴカヨとトゥランボンはともにチボリ町にあって、住民はビラーン族よりチボリ族が多いコミュニティーですが、医療を含めてCMBの支援対象となっています。モンゴカヨ小学校は平成11年度に、CMBから再び政府運営に戻しました。しかし政府派遣の教師はたった一人。結局CMBはサムラングのロバート先生を助っ人として派遣して、子どもたちが十分な教育を受けられるように配慮しています。

昨年1月のモンゴカヨ簡易水道(笠井氏寄付によるHANDS支援事業)竣工式に参加した会員・佐藤さんが、豊かで安全な水に大喜びの子どもたちの姿に感動して、代表を務める地元鎌ヶ谷市の国際文化交流グループ°ICECKの仲間に呼びかけ、新たにトゥランボンの水道建設支援を申し出ました。3月の長雨で資材輸送が中断しましたが、7月には完成予定です。一方、この地域担当のFr. ルーイは、水圧十分のモンゴカヨの水道を周辺地域に延長する工事を、地元、町の教会ボランティアグループの支援で始めました。

日本のHANDS、ICECKそして地元フィリピンのボランティアによる協力で、山のコミュニティー住民300家族余りが安全な水の供給を受け、医療衛生環境の改善も期待されています。

—子どもの通学の便を優先して続々リロケーションするキアミ住民—

昨年CMBはキアミの首長たちと伝統的契約の儀式を通じて、教育・医療・植林などのサービスを提供するための土地を正式に貸与されました。今3ヘクタールほどの土地に当会の支援で校舎二棟と穀物乾燥場兼バスケットコートが建設され、フィリピンの国の木ナラの苗木が植えられています。

この3月に訪問した時には、このコミュニティーセンターを取り囲むように、コゴングラスと竹を素材としたいくつかの民家の建築が進んでいました。山の遥か向こうの家から子どもたちが毎日学校に通うのは大変で欠席も多い。それならばいっそのこと学校の近くに引越しをしたらどうか。親が山を越えて畑仕事に遠征する方が合理的では、と始まった集団引越です。みんなでセンターを守るという意図もあると、地区担当のFr. ブランドの話です。

3人の教師のうち、ロウエンダ先生は産後体調を崩して現在ボールドで静養中。夫のボンド先生が彼女に付き添っていた2-3ヶ月間は、新卒のドリ先生が一人で1、2年生70人の面倒を見ていました。キアミの夜は天国のようです。満天の星と飛び交う蛍が歓迎してくれます。36回トラックで川を渡る長い道程の疲れも一度に癒されるところです。



谷川からの水汲みが日課のキアミの子どもたち